

■いわて文化ノート

八戸のお殿様と夫人のゆかりの地

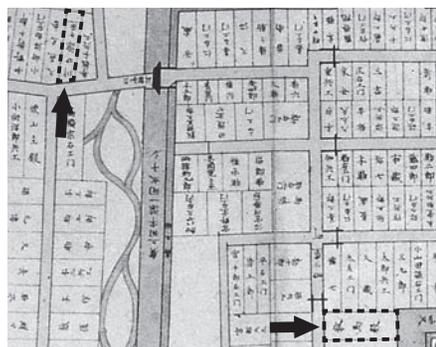
主任専門学芸員 佐々木勝宏 (歴史部門)

彼岸やお盆のお墓参りの際に、ご自身のルーツが気になって、調べてみたことはありませんか。

350年ほど前にできた八戸藩。今は青森県で、なじみが薄いとを感じる人が多いと思いますが、岩手県のあちこちにゆかりの地があるので紹介してみます。

〔1〕岩泉町中里・初代藩主母の郷

八戸藩の最初のお殿様は、盛岡藩主南部利直と側室仙寿院との間に生まれ、二百石の扶持と盛岡の四ツ家教会東南向かいに屋敷を与えられていました。藩主の子とは言え、中里直好(数馬)と母方の姓を名乗らされ、七戸家を継いで家老を務めた兄重信に比べると、かなり軽い扱いでした。母仙寿院は岩泉町中里の小領主中里氏の出でした。八戸の来迎寺地藏菩薩は、中里から八戸に移したもので、八戸の市街地に岩泉丁の名が残ります。中里氏と血縁の深い岩泉義包の姉妹の嫁ぎ先の煙山、接待、駒木、四戸、山口氏などが八戸藩士に採用され、中里氏が八戸藩の家老などの重職を務める家柄となるのも彼女のおかげでした。寛文五年(1665)に釜石尾崎埜に八十人の供を連れて参詣し、その往復、故郷に立ち寄り、前盛岡藩主側室から八戸藩主御袋様となって錦を飾ったわけです。



《もりおか歴史文化館蔵 寛永盛岡ノ圖
：中里数馬と川口源之丞の宅地部分》

〔2〕盛岡・二つの虚空蔵

寛文四年(1664)に幕府の裁定で、盛岡8万石が重信に、八戸2万石が直房(直好・数馬)に与えられ、不遇の部屋住みから大名になった中里数馬は南部直房と改名します。この時期のことを文久年間に八戸藩士接待治卿がまとめた『八戸祠佐嘉志』に興味深い話が二つあります。

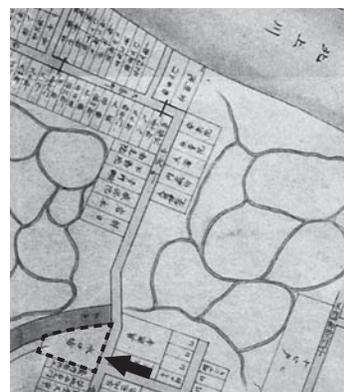
直房は、万治三年(1660)に盛岡の岩手高校のあたりにあった水口坊の虚空蔵菩薩に子孫繁栄を祈願して、二代藩主となる南部直政を授かり、後に、この虚空蔵を八戸に移したということ。

もう一つは、寛文四年(1664)に、米内の薬師虚空蔵(浅岸薬師神社に比定)へ、般若心経を毎日一巻ずつ書写して百日間の代参奉納した御利益によって八戸藩主になれたということです。

藩主になってから、京都で虚空蔵菩薩の檀像を作らせ、伊勢の朝熊山で開眼供養して八戸に祀り、篤く信仰しました。藩政時代は今の新羅神社に安置されていましたが、明治の神仏分離で出され、行方がわからなくなっています。子の直政も父に倣い島守の高松寺住職に命じて虚空蔵を祀らせました。これが今の福一満虚空蔵です。この像が、父から譲られた水口坊虚空蔵なのかも知れません。直政の誕生年の干支は辛丑であり、二代にわたって虚空蔵菩薩を尊崇していたことがわかります。

直政は誕生時に三人から命名されます。家老で叔父重信から武太夫とつけられ、この名の自著例も残ります。仙寿院とこの重信はともに沿岸育ちで、かなり親しかったようで、八戸からの贈答品は焼雲丹や鮭、鱈など海産物が吟味され、好みを知り尽くして書簡を交わしていた様子が窺えます。もりおか歴史文化館所蔵の『寛永盛岡ノ圖』とある正保年間の絵図に

仙寿院の実家、兄中里嘉兵衛宅は見えません。数馬殿とある数馬宅の場所が元々の中里氏宅だったかも知れません。二つ目は水口坊別当法明院日栄がつけた運八。三つ目は無量院がつけた彦八郎です。無量院は、元高橋勘五郎と言う家士で、直房の命によって修験の道に入り、直政誕生と直房の立身出世の両方の祈願に携わり、直房夫妻から絶大な信頼を得て八戸藩領内の修験を統括する地位につき常泉院栄尊となります。弟直常は運吉と彦次郎と命名されましたので、兄弟の命名にかかわったと考えられます。



《もりおか歴史文化館蔵 寛永盛岡ノ圖
：久慈町・山伏町と水口坊部分》

〔3〕岩手町川口・初代藩主夫人の郷

中里数馬(南部直房)夫人は、岩手町の川口館主川口源之丞正家の娘で俗名は孝でした。何と読むかは伝わりません。夫の死後に出家し、霊松院となります。正家の子女は一男四女が確認できます。四姉妹の長幼の順ははっきりしませんが、嫁ぎ先は千石の内堀家と、五百石の大釜家、三百石の千種家と、二百石の中里家でした。四百三十石の川口家の四姉妹の嫁ぎ先は、父が大坂冬の陣に出陣していますので、その頃からの交流や盛岡城奥勤めをしていた母耕雲院の尽力によって決まったのでしょうか。内堀氏は千石を越える家格で、初代は北氏、二代は榎山氏と、ともに家老格が婚家なのに川口家は

半分に満たない四百石ほどですが、三代目の妻となっています。不釣り合いなのに内堀家に嫁げたのか謎が残ります。川口四姉妹では孝が一番下だと考えられます。兄の死による実家川口家の改易以後の結婚のため、年齢的にも遅く、石高も最も低い家に嫁いだと推測されます。直政を生むのが二十八歳（年齢は数え）で、夫数馬は三十四歳です。養育していた甥の万之丞を連れて嫁いだと考えられます。仙寿院と耕雲院が御膳立てした結婚なのかもしれません。耕雲院は八戸と江戸を行き来の際、必ず盛岡の娘たちの嫁ぎ先（内堀・千種）に立ち寄ります。費用は霊松院が江戸から送金して負担していました。大釜家は川口家同様、重直により改易され、詳しい記録がありませんが、霊松院によって八戸藩に漆沢氏として召抱えられました。四姉妹の内三人の法名が奇跡的にわかりました。（内堀氏：天倫院・千種氏：覺心院・中里氏：霊松院）

〔4〕直政と直常の誕生地・盛岡

川口家は改易によって知行地も宅地も没収されたでしょうから、川口館や、田中地蔵尊を西に少し下ったあたりにあった川口源之丞宅で孝（霊松院）は出産できず、母方の実家朝倉家も元斯波氏家臣で、浪人していて無禄状態だったでしょうし、母は城奥に勤務していますから、中里数馬宅以外に夫人孝の出産場所は考えられません。弟直常も寛文三年（1663）に盛岡で生まれていますから、中里宅で生まれたはず。たくさん実のなる梨の木が庭にあって、八戸移住後も届けられ、懐かしい味だったに違いありません。孝は二十八歳で直政を、三十歳で直常を生み、幼子たちを連れて三十二歳で八戸へ移り、奥様と呼ばれるようになり、三十五歳で夫直房の急死に会い、三十六

歳で富を出産します。なんと夫の直房死亡時には身重だったことになります。

〔5〕霊松院ゆかりの二寺

藩政確立期に、知行地を持っていた領主たちは、地元寺院を開基し、菩提寺としました。霊松院の父が開いた岩手町川口の川口氏の明圓寺、霊松院の姉妹の嫁ぎ先の滝沢村大釜の大釜氏の東林寺、花巻市石鳥谷町新堀の内堀氏の新仙寺もその例です。

明圓寺は川口正家によって開基され寺領三十石を与えられました。正家奉納の梵鐘と、娘霊松院が修理した正家の厨子入位牌や、霊松院が奉納した香炉と花立が現存します。正家の相続人正康が病死すると、その子がまだ二歳だったために改易となり、正康の妻は実家高橋家に帰され、忘れ形見万之丞は祖母耕雲院が引き取り、叔母孝（霊松院）が養育しました。この子が後に八戸藩家老となる川口利景です。耕雲院は斯波氏に仕えた朝倉氏の娘で、朝倉源太左衛門（耕雲院兄弟と考えられる：紫波庄左衛門と改名）は八戸藩に召抱えられ、出身地が志和だったので志和（紫波）氏と名乗りました。二代目は霊松院の育てた川口利景の次男利秋が継ぎ、その子秋元は川口家の世襲名であった祖父と同じ源之丞を名乗りました。

〔6〕紫波町志和・八戸藩領飛び地

八戸藩の領地のほとんどは青森県八戸周辺と岩手県北部にあり、ヤマセの被害を受けやすい地域です。そこで穀倉地帯でもある紫波郡紫波町志和（上平沢、土館、稲藤、片寄）を飛び地として選んだと言われてきました。でも、その理由だけなら志和でなくてもよいはず。志和を望んだ理由は、藩主夫人の母（耕雲院）の故郷で、よく知る土地だったからでしょ

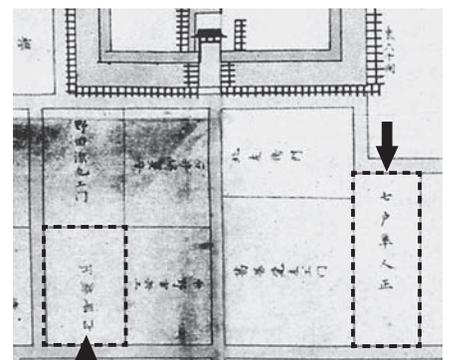
う。霊松院や直政弟直常の領地は志和にありました。祖先ゆかりの大切な場所だったからこそ、直常の病死後、その知行地志和に、追善供養のために澤口観音堂を建立したのでしょう。

滝名川から北上川への水運が使い、奥州道中もすぐそばにあります。岩手山への藩主家代参などで人馬が必要な時は、八戸から連絡を受けて志和から提供していました。盛岡藩の城下に近いということは盛岡藩との連絡や調整のためにも好都合だったはず。

盛岡から北に七里は川口で、南に七里が新堀で、北上川水運でつながっています。ともに霊松院の両親ゆかりの地です。

〔7〕石鳥谷の新堀・内堀家の領地

浅井長政滅亡後は、前田利家に仕え、使者として三戸の南部信直を度々訪れたのが縁で南部家に仕官し、盛岡城の縄張を担当した内堀伊豆頼式の孫頼宗の妻は霊松院の姉妹天倫院です。新堀の新仙寺に歴代当主と並んで大きな墓石があります。新仙寺本尊の釈迦如来坐像は頼式次男幸政の子善左衛門慶伴が正徳二年（1712）奉納したと光背銘に刻まれています。



《もりおか歴史文化館蔵 寛永盛岡ノ圖
：内堀織江と七戸隼人正の邸宅地部分》

このように八戸藩の領地以外にも岩泉町、紫波町、岩手町、盛岡市、花巻市などに八戸藩ゆかりの場所があります。